特　集

Repository Miner
― 機関リポジトリは宝の山 ―

筑波大学
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

宇陀則彦
UDA, Norihiko

現代図書館学の祖の一人、ピアス・バトラー（Pierce Butler）は文献宇宙という概念を創出し、人間の頭の中にある観念としての知識を文献という具体的な形の集合体として、世界の知識を把握することを考えた。機関リポジトリは現代の文献宇宙を構成することができるだろうか。

機関リポジトリに関する議論は「アクセスや保存の新しい形だ」、「出版に変わる新しいビジネスモデルである」、「学術成果の社会への還元である」など、意義をアピールするものが多い。それはそれでわかるのだが、どうももう一つ説得力に欠けるというか、具体的なイメージが浮かばないのは私だけではないと思う。何かもっと素朴な議論が欠けているような気がしてならない。実は私も機関リポジトリをプロモーションする側にいるのだが、先生方に対して論文や教材を登録してくれと確信をもって説得するだけの理由をもちえていない。そこで自分自身を説得することを第一目標に、機関リポジトリについて考えてみた。その結果、コンテンツそのものの議論、すなわち性質や利用についての議論が欠けていることに気づいた。

機関リポジトリの問題点の一つに質の問題がある。ピアレビュー論文がきちんと登録されなければ、機関リポジトリは質の悪いコンテンツばかりになって誰も利用しないのではないかという指摘である。確かにピアレビュー論文が機関リポジトリで読めるようになることは重要であるが、私はむしろ予想外のコンテンツが出てくるところに機関リポジトリの面白さがあるのではないかと思っている。機関リポジトリをプロモーションするなら、「登録すべき論」よりも「利用すると面白い論」のほうが説得力があるのではないだろうか。

Google を多くの人が使うのは Google 自体が面白いからである。Web 情報の大部分は質が低いとよく言われるが、それでも質の高いコンテンツは十分な量で含まれているし、大部分の人が価値のないコンテンツと判断しても、ある人にとっては宝ということがありうる。機関リポジトリも同様のことが言える。

機関リポジトリの性質上もう一つ重要なことは、図書館あるいは大学が、自由に編集できるコンテンツを持つに至ったという点である。このことは、図書館が情報発信する側にまわったという単純な話ではない。より積極的に、コンテンツを編集し、付加価値を与えるようなサービスを展開できるようになったことを意味する。オーバーレイジャーナルはその典型であるが[1)]、編集方法はオーバーレイジャーナルだけに限らない。複数機関のリポジトリを連携させ、その中から関連のあるコンテンツをピックアップすることは研究者の関心に応じて何パターンもありうるだろう。

これまでコンテンツ自身にはノータッチだった図書館が、研究者と協力しながら、編集者的立場で利用者にきめ細かなコンテンツ提供サービスを行うというのは図書館サービスの新たな展開を予感させる。Google のサービスは確かに強力だが、

個人ごとに検索結果を変えるというところまでいくにはまだ時間がかかると思われる。（たぶん）

機関リポジトリをプロモーションする理由、それは機関リポジトリが宝の山になる可能性があるから。機関リポジトリ自体が面白いから。使ってみて面白いことがわかれば、プロモーションしなくてもコンテンツは増える。何が出てくるかわからない、知的刺激を与えてくれるものが機関リポジトリである。

1）阿蘓品治夫．機関リポジトリを軌道に乗せるため為すべき仕事 ― 千葉大学の初期経験を踏まえて ―．情報管理　Vol. 48, No. 8 p.496-508, 2005（http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/48/8/48_496/_article/-char/ja）